

浄土

1995・5



掘りどころを持つ◇中原実道

観音さまに会う◇松平實胤

「ティク・ナット・ハンについて」戸松義晴氏に聞く

【連載】

楽屋ゆかた————関 容子

教育の現場から————内堀照夫

念仏信仰の系譜————須藤隆仙

共に生きる————御所野洋幸

誌上特設ぎやらしい

忘れられた寺院●横村克宏

法然上人讃仰会・発行



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との

固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に

花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

■ 誌上特設ぎゃらりー ■

忘れられた寺院…
②

photographer

横村克宏









忘れられた寺院

バイヨンは大寺院アンコール・トムの中心すなわち東西南北の各大門から1キロ半の所に位置し、岩石を山のように築きあげた壮大な仏教寺院である。

一九六の面を持つ巨大な観世音菩薩の像がそびえ立つ多数の塔に刻まれている。

このかつて、まさに壮麗であった寺院もまた長期にわたる内戦の戦禍によって破壊され崩壊の危機に瀕している。

写真家、横村克宏はこうした状況を憂い、いまあえて「文化財の国際赤十字」を提唱するという。多くの写真家と連携しHELPという団体を起こし「アンコール遺跡群の光と影・ドキュメント1995-1996カンボジア」という写真展を企画し、いまより多くの支援賛同を求め、働き掛け続けている。

浄土

1995/5月号 目次



カラーグラビア忘れられた寺院	写真=横村克宏	3
抱りどころを持つ	中原実道	8
観音さまに出会う	松平實胤	16
楽屋ゆかた坂東橘太郎(一)	関 容子	24
コラム		31
教育の現場から	内堀照夫	32
念仏信仰の系譜日本編②	須藤隆仙	46
コラム		47
表紙は語る 共に生きる	御所野洋幸	48
ひとりひとりが蓮の花になる	ティク・ナット・ハン	52
Jフォーラム		61
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影=御所野洋幸

アートディレクション=近藤十四郎

偏依

抛りどころを持つ

中原実道

今現在の私自身の問題

阪神淡路大震災、思ってもない大災害が起きました。諸行無常を痛烈に思い知らされたことであります。

一瞬の内に崩れた建物の下敷きになった方々、また、救いどころと懸命の肉親の方々、どのような思いの中に極限に臨まれたことでしょう。

平常から信仰を持つ者、もたない者。正しい信仰を持つ者、持たない者。平常からの念仏者、そうでない者。それぞれ、どのような臨まれ方をなさったのでしょうか。

そして、現在、被災した際の恐怖、ショックが原因で起こる身心症状に対する、精神的ケアが重要になってきました。

このような状態のもとで、果して、私はどのような生きざまができることでしょう。

絶対的抛りどころを持つ

抛りどころを持つものの強さ

心理学の実験で皆様よくご承知だと思いますけれども、こういう実験がございます。お母さん猿を二匹金網でつくるんです。片一方のお母さん猿の方は、金網むき出しのまんまのお母さん猿です。もう一方のお母さん猿の方は、皆様方が今身につけていらつしやいますように手ざわりのいい、あつたかい布を張りつけてぬいぐるみにしてあります。両方のお母さん猿とも豊かなおっぱい、そしてあつたかいミルクがたくさん出るようになってあります。その二匹のお母さん猿をこういった大広間に置いて、子猿たちが自由に飲んでいいようにしてあるわけであります。遊び回り、走り回り、遊び疲れた子猿たち、おなか

がすいた子猿たちがお母さん方へ寄っておっぱいを飲めるわけであります。それをじっと観察しておりますと、どうも人気のいいのは、あったかいぬいぐるみのお母さん猿の方なんです。そしておっぱい飲むときだけじゃなしに、遊んでいるときにもそのお母さんに抱きついたり、よじ登ったり、寄りかかったり、ひつつきもつつきして遊んでいるわけなんです。そういう姿が観察されました。

これにはもつと次の話があるわけなんです。この二匹のお母さん猿を別々の小さな部屋に置きます。そして子猿たちも半分ずつ分けて置かれるわけです。そしてそこで一カ月ほど別々の生活をさせます。ぬいぐるみのお母さん猿の方へ行った子猿たちは、これはもう元気に遊んでいます。追っかけ回ったり、天井に登ったり、寄りかかったり、おっぱいにしゃぶりついたり、ひつつきもつつきして遊んでおります、そういう姿が見られます。金網のお母さん猿の方へいつてみます。こちらの子猿たちも大変元気であります。追っかけっこして、天井に上り、隅へ逃げ、そして組みつはぐれつ遊んでいます。そしておながすすきますとミルクを飲み、そのときだけお母さん猿のところへやってきて、金網のお母さん猿のおっぱい、口を突き出して飲む。そして飲んだらまた離れて遊び回っているわけであります。そういう姿が観察されます。

そして一カ月ほど後、また二匹のお母さん猿を一つの大広間に集めます。子猿たちもみんなぞろぞろついてきます。そしてそこで集まってきた子猿たちをじっと観察しておりますと、金網むき出しのお母さん猿のおっぱいを飲んだ子猿も、ぬいぐるみのお母さんに抱きついてくつつきもつつきしながらおっぱいを飲んできた子猿たちも、もうどこにも違いがありません。一様に同じように元気に走り回り、飛び回り、追っかけ回してやっているわけであります。そうなんです。平生何事もないときにはみんな一様に元気なんです。

ところが、ここに子猿たちのおびえるようなある事柄が出来たします。にわかにトラのぬいぐるみがウオツというほえ声と同時に出るのです。子猿たちは初めて経験する何か恐ろしいことでありますから、瞬間どの子猿もぎよつとするんです。そして次の瞬間、クモの子を散らしたようにわあつと逃げ回り始めますが、すぐさま様相が変わってきます。一カ月の間ぬいぐるみのお母さんに抱きついてくつきもつきしながら遊んできた子猿たちは、いつの間にかお母さんにしがみついているんです。そして仲間同士肩を寄せ合つて、もつとお母さんにしつかりと潜り込もうとしてしつかり抱きついていて。そのときになつても、金網むき出しのお母さん猿のおっぱいを飲んだ子猿たち、抱きつくことを知りません。おろおろおろおろ、一匹一匹みんなばらばらに不安げに逃げ回っているわけがあります。

さらに時間が経過します。お母さんにしつかり抱きついて、仲間と一緒に肩を寄せ合っている、その安心からでしょう。あのぬいぐるみのお母さんに抱きついている子猿たちは、恐ろしいなそのトラのぬいぐるみを横目でちらちらとこう見ているんです。そのときになつても、金網むき出しのお母さん猿の子猿たちは、今なお不安げにおろおろおろおろと逃げ回っているわけがあります。

そうなんです。おびえなければならぬ現実、目をそらしたくなるような現実、それから逃げなくて、それに向かつて目をびたと捉えてその現実を見つめることができる、そういう力が子猿たちの体の中に自然にいつの間にか湧いてきている。

「握りどころ」を持たないすがりつくものを持たない子猿たちは、今なおそういった力が出るどころか、不安なまま逃げ回っているわけがあります。

そしてさらに時間が経過します。しつかりと抱きついて、そしてその安心から、その恐

ろしい、目をそらさなければならぬようなものをちらちらと見始めた子猿たち、やがてそのトラがそれ以上のものでないというのがわかってきだしますと、片一方の手と足でお母さんをしっかりと握って、あいた手と足でちよつとちよつとちよつかい出し始めたんです。そのときになっても、片一方の金網のお母さん猿の子猿の方はおろおろおろと逃げ回っているわけでありまして。不安げな様子です。

そうなんです。あの目をそらしたくなるような、逃げたくなるような現実へ眼を捉えて、そしてそれを見つめることができるようになった子猿たちは、やがてその逃げなければならぬ恐ろしいものへ向かって挑みかかっていく力が、いつの間にか湧いてきているんです。そしてそれも自然に、気がついたらどうしようもなしに出てきているんです。

平常、何事もない時の、人々の生きざまは、それほど大きな違いはありません。

が、諸行無常を思い知らされる大問題が突然生じたときに、逃げどころを持つ人と、持たない人とはつきり違いが出てきます。逃げどころを持つ人は強うございます。

子どもにとつては、親は絶対的逃げどころであります。

私たちは浄土宗徒にとつては、阿弥陀様は絶対的逃げどころであります。阿弥陀様の御本願に抱かれおります。そして、「南無阿弥陀仏」と称え絶対にするがごとく阿弥陀様を持つております。本当に、幸せなことでございます。

この度の大震災においてもご承知のように、絶対的逃げどころとしての親を持たない子は不安であり、また、心の絶対的逃げどころとしてのしっかりと信仰を持たない人も不安であり、共に、第二級の逃げどころでしかない、精神科医・カウンセラーを、心の逃げどころとして必要とします。

第二級の抛りどころ

不安に抛りそうカウンセラー

その（一）

「先生、私は鯨。潮がどんどん沖の方へ退いて行ってしまうの。一生懸命泳ごうとするのにためなの」

高校1年生で、登校できなくなった女生徒が、カウンセラーである和尚の私に訴える。

「父さん母さんを、苦しいので尻尾ではねとばしたの、怪我させたの」と、家庭内暴力の話をしてくれる。

「父さん母さん、私の背中へむしろを掛け、水を掛けてくれるの。守ってくれてるの」と、数回後の教育相談で話してくれる。そうして、言う。

「先生、潮が来るだろうか。私、泳ぎたい。先生、潮来るだろうか」

カウンセリングを受け、着実に変化している中に於て猶、不安で不安でたまらない心の様子を話してくれる。

「うん、不安なのだね。はやく来ればよいのにね」と、添い続ける。

やがて、2月。

「先生、潮が来てる」

「そう、見えるか」

「はい、見える。どんどん来てる」

「そうか、来てるか。よかったね」

「はい、安心した。今度は泳ぐよ。沖へ」

今年も賀状が届いた。四歳・二歳の母親として、充実した生活をしている由。

その(二)

数回のカウンセリングの後、

「先生、私はモーター・ボートだった。今、大きな海に行く船が見えて来るの」

「ほう、モーター・ボートだったの」

「はい」と言つて、高校総体の代表選手であること、生徒会委員であること、受験を控えていること、目的へ向かつて一目算にまっしぐらにフル・スピードで突っ走つていたこと、波の腹を突き抜いて進んでいたモーター・ボートであったこと、今、大きな波に出会い転覆・沈没してしまったことを話してくれる。

そうして、今、大海に行く大きな船が見えてきたことを話してくれる。

大海に行く船、波の上に押し上げられて赤い船腹が見えている。やがて、ぐうんと沈んでマストの先だけが見えてる。しばらくすると、ずっと前の方の波の上に船が出てくる。

「先生、あの船、波の上にあるときも、波の底にあるときも、安心して浮かんでいるのですねえ。安心して浮かんでいるから、心配せずにエンジンは休まずスクリュウは回り続けておれるのですねえ」

「私、スランプの底になったとき、もうおしまいと不安で何も出来なくなつてしまった。でも、あの大きな船、波の底にいるときも安心して浮かんでいるのですねえ」と。

不安で不安でたまらなかつた者が、その不安を越えて安心な心になつて行く。お釈迦様の説かれる事が分かる、出来る人にと変わる。

「未来を思い煩うことなかれ」と、そして「今、行すべきことを行せよ」と。

絶対的掬りどころに在る為

和尚はその援助者カウンセラー

『観無量寿経』に説かれてありますように、「仏心者大慈悲是。以無緣慈。摂諸衆生」と、阿弥陀如来像は「無条件」のお慈悲でもって、私たちをお救い下さるのであります。罪惡深重の泥凡夫の私を、そのままに無条件に大事に見守り援けて下さるのであります。

貪・瞋・痴の三毒煩惱に執われて、動けなくなっている姿、どうしようもない姿を、そのままに・無条件に・肯定的に「受け容れていくカウンセリング・マインドは、阿弥陀様の御心の、御本願の、現代精神科学的表現であります。

阿弥陀様は、この私をこの身このままに大事にしてください、私の心の掬りどころになつてくださいます。

この御恩に報いるためにも、私は、不安におびえる人に寄り添い、その人の心の支えになればと、カウンセリングに努めねばと考えます。

掬りどころとしての親を持たない人に、カウンセラーとして、しっかりと寄り添いたいと思ひます。

心のうちをしつかり傾聴して差し上げること、人間として万策尽きた絶望の淵から光明を見出す信仰の目覚めへと、お念仏申せる人へと教化の道が開かれるのであります。

カウンセラーという人間を掬りどころとしなければ生きられなかった者が、阿弥陀様をお念仏を絶対的な掬りどころとして生きる者へと導かれるのであります。

合掌

(岡山県総社市清雲寺住職・就実短期大学教授)

観音さまに 出会う

犬山・寂光院山主

まう だいら じつ いん
松平實胤

特別寄稿

一、縁の不思議

お釈迦さまは今から二千五百年ほど前、八十歳を一期として入滅されました。今でこそ日本では人生八十年ですが、今から二千五百年前、熱い熱いインドで、医学も医療も発達していない時代の八十歳は極めて「長寿」だったに違いありません。

お釈迦さまの最晩年の様子を記した経典を「大般涅槃経（たいはんねはんぎょう）」といいます。そこには次のくだりが出てまいります。お釈迦さまは「悟りを開いた仏陀は思うとおりに寿命を伸ばすことが出来るんだよ。しかし、私はまもなく寿命を終えることにした」とおっしゃっているのです。私はその場面に会った時、「お釈迦さまは八十歳で亡くなられてよかった」と思いました。生あるものは必ず滅びる。たとえ地位があろうが名誉があろうが、財産があろうが、生者必滅に特権階級も例外もありえないことを示された

のだと思いました。

お釈迦さまの臨終の地はクシナガラでありました。この地は今も淋しいところですが、当時も場末の町であつたようです。先の経典には、弟子が「ここは偉大な仏陀の臨終の地にはふさわしくない」と嘆く場面があります。しかし、お釈迦さまは「こここそが、私の臨終の地だ」とお答えになっています。

私は、お釈迦さまが平凡な淋しい町クシナガラで亡くなられてよかったと思つています。誰だって、「今」を過ごす場所は「ここ」しかありません。たとえ地位名誉財産があろうが、「ここ」を変更出来ないことに關して、一つの例外も一人の特権階級も認めないことを自ら示されたのだと思います。

自分の意志と努力で到底及ばないところで決定される条件を「縁」といいます。お釈迦さまが八十歳で、クシナガラで亡くなられた、これも「縁」のなせるわざでしょう。

二、お釈迦さまに出会う旅

さて、お釈迦さまの亡くなられた場所クシナガラは仏教徒にとって記念すべき所「緑」ある場所となりました。実は先ほどの「大般涅槃經」の中に出てくることですが、お釈迦さまはこんなご遺言をおっしゃっておられます。「私の亡き後は私の記念すべき場所を訪ねて欲しい。きつと私にあえる。まず、私の誕生の地ルンビニー、私が悟りを開いて仏陀になった成道の地ブッダガヤ、私が悟りの内容を人に聞かせてはじめて布教に成功した場所サルナート、そして、今まさに完全な悟りの世界（涅槃）に入るこの地クシナガラ。この四つは誰でも訪れて感激する場所である……。」お釈迦さまは自ら四大聖地の巡礼を勧めておられるのです。

私も巡礼をさせていただいたことがありますが、巡礼のたびごとに新たな感動、感激で、涙が頬を伝わること一再ならずありました。

インド仏跡の巡礼は「お釈迦さまに出会う旅」といっていいでしょう。

三、観音さまに出会う旅

さて、日本では古くから、観音信仰が盛んです。一番伝統ある霊場は、京の都を中心として関西地方一円を巡礼する西国三十三ヶ所です。この札所巡礼の中興の祖は平安時代中期の花山法皇です。さすがどの霊場も歴史の重みを感じますし、雅な華やいた雰囲気がかただよいまします。鎌倉を中心として関東一円に点在する坂東三十三ヶ所は、関東武士の剛毅な雰囲気を感じます。秩父地方の秩父三十四ヶ所には大寺はありません。野の寺、里の堂、規模も小さく手頃に巡礼出来る、まさに庶民の霊場です。これでしめて日本百観音、それぞれに味わい深いものです。

この観音巡礼は、観音さまに出会う旅といつていいでしょう。しかし、お釈迦さまは実在の人物ですが、観音さまは実在した方では

ありません。そこで、「観音さまに出会う」というのはどういうことなのか、少し考えてみたいと思います。

観音さまは、「観音経」(正式には「妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五」)として親しまれるお経の中に登場する菩薩さまであります。ということはその観音経に説かれていることを信じてはじめて、その人は観音さまの存在を信ずることが出来るということになります。

さて、観音経には「観音さまはこの娑婆世界、私たちの住むこの世界で、いつも人々を導いて下さっている。その観音さまのお姿は一定ではない。三十三に姿をお変えになる」とあります。三十三とは無限無量の意。その人に一番ふさわしいと思われる姿に変えられるのです。この世に五十億の民あれば、五十億通りのお姿があるということです。ということは、私たちには姿形でそれが観音さまか、どうかはわかりません、出会う人、出会う人、

それぞれが観音さまかもしれないのです。

四、実は私も観音さまに出会いました

私もこの年です。幾度となく地獄で仏に出会いました。これもその一つ。

それは高校一年の春休みのこと、友人と三人で山陰地方に旅に出ました。時代が時代です。高校生の旅行ですから、貧乏旅行です。より安く、より遠いところに旅をするのです。そこで、わずかな旅費を持ち、夜行列車を選んで移動します。夜行がなければ、駅の待合室で寝るのです。しかし、三月下旬といって山陰は寒くて、駅の待合室は大きな誤算でした。

それは四日目の晩でした。松江に近いある小さな駅の待合室のことです。三人が寒さをこらえながら、肩を寄せあっておりまして。その時、和服姿の美しい女性が近づいて来ました。とても優しそうな中年女性でした。「こんな所で何しているの」と尋ねてきまし

た。もし、それが警察官でしたら、おそらく私たちは逃げ出していたかもしれません。決して悪いことをしていたわけではありませんが、所詮家出少年にしかみえなかったでしょう。

そこで「実は……」と本当のことを答えました。そうしましたら、その女性は、「こんな寒い所で……。とにかく私についてきなさい」と私たちをタクシーに乗せてとある所に連れて行きました。到着後、「しばらく待ってなさい」とその建物の中に入って行きました。そこは国民宿舎でした。その女性はフロントで何か交渉しているようでした。建物から出てくると、「今晚はここでゆっくりお休みなさい」といってそのままタクシーで去って行きました。あつけにとられてフロントに入ると、すべての手続きと支払は済んでおりました。私たちは一夜、暖かい布団でぐっすり眠ったものです。翌朝、フロントを尋ねると、その女性の名前も住所も分からない

ということでした。

私は旅を終えて、家で父にそのことを話しました。「それは地獄で仏だったね。きっとその女性は観音さまだったんだよ。いい人に巡り合ったね」といつてくれました。私は新聞の記者欄に「松江の近くの駅で親切にして下さった方、もしこれを読んで下さったら、ご返事下さい」と投稿しました。ひと月、ふた月たっても、その後返事はありませんでした。父は、「その女性はきっとおまえの投書を読んでいるはずだ。しかし、決して名乗らないだろう。とにかくその女性は観音さまなんだからね。名乗るはずがないんだよ。とにかく、観音さまだと信じて、心の中で感謝することだね」と教えてくれました。

「そうだね、お札は無理なんだね……」とのおも諦め切れない私を見て、父は、最後に一言いいました。「その人にはお札は無理としても、とにかくお前も人にはとんだ親切にすることだ。その親切がまためぐりめぐ

て、その人にお返しすることになるかもしれないからね……」

駅の待合室で出会ったのが警察官でしたら、私たちは逃げ出していたことでしょう。しかし、観音さまが私たちを見るに見かねて一番ふさわしい姿で現れたとしか言いようがありません。これは生意氣盛りの少年時代の思ひ出すが、何故か少年の私にも本当に観音さまに出会ったように思われてなりませんでした。

松江にはその後一度も訪れてはいませんが、私にとっては観音さまに出会った記念すべき場所として思い出深い所です。

五、憎たらしい観音さまもいます

私は松江で美しい観音さまに出会いましたが、世の中そうばかりではありません。出会う人が凡で観音さまだと思いたいのですが、そうは思えない場所が多いですよ。中には憎たらしい人、意地悪な人、恐ろしい人もいま

す。

しかし、その人たちが凡てみな本当は観音さまだと受け止める、これが観音信仰です。

例えば、石つぶてを投げ、中傷デマを言いふらすような、憎んでも憎み切れない人もいるでしょう。しかし、みな観音さまなら、きつとこの人は「おまえは人に石を投げる側には立つなよ」と身を持って教えて下さっている観音さまかもしれないのです。「中傷デマは不愉快なことなんだ。お前は人にこんなひどいことをしちゃいけないよ」とあえて教える側に立った観音さまかもしれないのです。こんな風に考えるには時間がかかると思いますが、その時はじめて憎しみが消え、心安らくなり、「やはりあの人も観音さまだったんだ」と気付くではありませんか。

実は私は二十六歳で地縁血縁のまったくない地方の山寺の住職として赴任しましたが、その当時は中傷デマに苦しんで、人間関係に絶望したことが一再ありました。時間

はかかりましたが、あの憎々しい方々、意地悪な方々も、若僧の私を鍛えて下さった観音さまだったのかもしれないと今では思えるようになりました。

六、あなたも観音さまになれる

先に、観音経の「観音さまは三十三に姿を変えろ」というくだりを私は「五十億の民あれば、五十億とおりの観音さまがある」ということだと申しました。ということとは、早い話が、私自身が実は観音さまかもしれないんですよね。「出会う人、出会う人、凡てを観音さまと受けとめる」ということは、結局自分も観音さまだと気付くことはないでしょうか。

三十三所の観音霊場を巡礼すること、これは、一番札所から寺々を歩きながら、観音さまに詣でながら、道中いろんな人に出会って助け助けられ、苦楽を味わいながら、結局自分以外はみな観音さま、そして自分も観音

さまだと気付く旅ではないのでしょうか。ということとは、インド仏教巡礼がお釈迦さまに出会う旅、同様に三十三所観音巡礼は観音さまに出会う旅といって間違いありません。

七、観世音一聲無き声を見極める

観音さまのお住まいは補陀洛山（ふだらくさん）です。観音霊場に補陀洛山○○寺という名のお寺が多いのは観音さまのお住まいだということからでしょう。また観音霊場の本堂を大悲殿とか大悲閣と申しますが、観音さまのお働き、「大慈悲」からきています。「慈」は「共に喜ぶこと」の意、「悲」は「共に悲しむこと」の意です。喜びごとは共に喜ぶことにより、その喜びは倍增します。悲しみごとは共に悲しむことにより、その悲しみは半減します。観音堂は大慈悲に満ち溢れているからでしょう。

さて、観世音というお名は「世の音を觀察する、見極める」という意味です。世の音と

は、私たちの声のことです。喜びや、怒りは必ず大きな声が出ます。たとえ観音さまがうとうと居眠りをしているようにその喜び怒りを聞き付けます。しかし、悲しみは問題です。

声を上げて泣くのならまだ大した悲しみではありません。むしろ問題なのは声無き声であります。悲しみに声も出ない、ただ放心状態というのは最悪の場合です。ということは観音さまは耳を頼りにしてはいけないのです。その声なき声ほどじっくりと観察する、見極める必要があるからです。

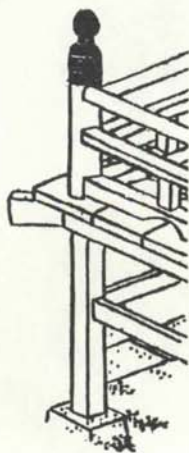
八、慈悲―たくさんの顔、たくさんの手、

たくさんの眼

観音さまのお働きは大慈悲ですが、そのお働きを具体的に形て表したものが十一面千手千眼の観音像です。十一面は「四方八方十方」とありとあらゆる方向に気を配っておいてなる」、千手は「同時に沢山の人が一斉に助けを求めても、無差別平等にさつと慈悲の救

いの手が出る」、千眼は「無差別平等に優しいまなざしで見る事が出来る」、このお働きをお持ちなのが観音さまです。観音さまは補陀洛山から私たち一人一人をくまなく見守っておいてなるのです。三十三観音霊場札所に山寺が多いのはそのような理由からでしょう。

こんな予備知識をもって観音さまをお訪ねしてみたらいかかがでしょうか。観音さまをお訪ねするうちに、まわりのみんなが観音さまだと気付いたら、この世も捨てたものではありませぬね。



楽屋ゆかた

その八

連載

坂東橘太郎

(一)

関 容子

橘太郎が四天（捕手や軍兵）の先頭を切つてキビキビと登場してくると楽しくなる。無類の運動神経を駆使して、今日はどんな胸のすくウルトラCの妙技を見せてくれるのかなど、期待で一杯になるからだ。

『蘭平物狂』で、三メートルの屋根から石灯籠の上へ返り落ちして、さらに舞台へ返り落ちする、連続二回宙返り。『千本桜』（小金吾討死）で、かがんだ黒四天九人の背中を返越しする九人跳び。まるで五条橋の牛若丸のように身が軽い。

そう言えば童顔で小柄なところも、土俵の牛若、舞の海を思わせる。

板東橘太郎。屋号は橘屋。昭和三十六年東京生まれ。六つとき師匠市村羽左衛門の『盛綱陣屋』に小三郎役で初舞台。板東うさぎを名乗り、子役として活躍する。二十歳で橘太郎と改名。昨年一月名題試験に合格。今年の一月『対面』の秦野四郎役で名題昇進披露をする。

「生まれは大井町です。両親はぼくが生まれ

るとすぐ離婚したんで、祖父母と、母と、兄と、ぼくの五人暮らしでした。おじいちゃん、は屋台のおでん屋。でも気づくだけはいい人でした。小さい孫にコイコイ（花札）教えて、自分が負けそうになるとカッカしたりして（笑）、近所で火事るとき眼鏡と座布団と花札持って逃げた、って人です。あのころおばあちゃん、ぼくをおんぶして、屋台に兄を乗つけて、おでん屋台の後押ししてる姿をよく見た、って近所の人から聞いてます。おじいちゃん、ぼくが八つのころに亡くなりましたけど、おばあちゃん、ぼくが橘太郎になった二十のときまで元気でした」

私は橘太郎に、何年か前に会って『忠臣蔵』（五段目）の猪の芸談を聞いたことがある。猪の中に入る役者の名は筋書には載らないので、だれに聞いたらいい？ と歌舞伎役者のことなら何でも知っている口番（楽屋口の番）田代紋太郎さんに相談すると、即座に橘太郎の名を挙げた。田代さんの眼鏡に叶っただけあってさすがに橘太郎の話は生き生きしていたし、人柄にも好感が持てた。



板東うさぎの初舞台は昭和42年6歳の時で、「盛綱陣屋」の小三郎役。左は師匠の市村羽左衛門

だから今年一月の筋書で橘太郎の名題昇進を見つけたときは、何だかとても嬉しかった。

「おばあちゃんは芝居好きで、自分も小芝居で長唄に出たりもしましたし、その妹（大叔母）はうちの師匠の付き人で、また、その下の妹はついこの間まで三津五郎旦那の付き人でした。それでぼくはいつの間にか楽屋で跳んだり跳ねたりして遊ぶようになるわけですが、その前に、ある日おばあちゃんが兄を連れて芝居見に行つて、たしか『道成寺』の撒き手拭が兄の頭にボンと当たつたんですつて。これはこの子は役者にしなくちゃいけない……つて。どんでもないばあちゃんですな（笑）」

それで橘太郎の兄は羽左衛門に入門し、坂東橘丸となる。橘太郎も一諸について行つてゐるうちに、気がついたらある日子役になつてゐた。うさぎという変わった名前は、子供のところから色白でビヨンビヨン跳ね回る元気者だったし、うさぎの「う」は羽左衛門の「羽」でもあるという。

「十五代目羽左衛門という方が耳が大きくて

『うさぎ』と言われたらしいですが、あんな

いい男の名優にあやかつてみたいで嬉しいです。でも松緑旦那の楽屋まで行つて悪さを

したら、『こらつ、おめえなんかう抜きさ、きにしちやうぞ』つて脅かされましたけど、

松緑旦那は恰好よくてあこがれてました。綱（茨木）の波辺（綱）の幕切れなんてしょ

つちゅう旦那の部屋で真似してましたから。

あれはカツと口を開けて大見得をするわけ

ですが、舌を赤くするために食紅を小皿に溶いてなめるんです。ぼくが見ると『なめたい

か』つて、皿をスツとさし出して下さる。ペロ

ツとなめて、足を前後にパツと開いて得意になつて幕切れの見得をして見せる。松緑旦那

はそれ見て笑いながら、機嫌よく舞台へいら

つしやる、というわけです」

うさぎは楽屋中で可愛がられた。

その年代にちやうど子供がいなかったせい

か、『先代萩』の鶴千代、千松は何度もつとめたし、『乳房榎』の真与太郎役では国立劇

場特別賞をもらつてゐる。うさぎが十一歳の

ときで、本来はもつと小さい子供がつとめる



昭和43年5月、大阪新歌舞伎座での「先代萩」の干松を演ずるうさぎ

役だが、

「御覧の通りチビですから結構長く子役でして、お前、大きくならない菓飲んでるのか、なんて言われたりしました」

ところで京都南座の顔見世では、劇場の前に役者の連名の招き看板が掲げられるが、ここには名題以上か名題の資格はなくても名門の御曹司かでなくては名前が出ることはない。しかし、「板東うさぎ」という招きが三年間、南座に上がったことがあるという。

「あ、そのことは、どうも成駒屋の旦那（歌右衛門）のおかげらしいんです。南座の前の月に名古屋の御園座で『先代萩』が出たんですが、そのとき旦那が政岡でよくが鶴千代。

鶴千代は若君で政岡は乳人（めね）ですから、『子役が三階の大部屋から出てこられたんじや、あたしが頭下げにくい』とおっしゃったとかで、名題さんの弥五郎さん、田門さんが、それにほくより二つ年上の今の門之助（当時小米）さんと、四人部屋へ入れてもらいました。

「よくおぼえた」と大成駒から御褒美をいただいたと思います、あくる月は京都へ行って

役が『盛綱』の小四郎になったんで、楽屋はまた三階になりましたけど、招きに名前がのっちゃった。でもそのうちのらなくなつて……死んだ人以外では、そういう例はないんじゃないかと思えますよ（笑）」

でも橘太郎はめでたく名題になった。今度京都の顔見世に出れば、堂々と招きに名前がのるだろう。

それにしても、名古屋、京都と何か月も東京を離れる子役は、学校のほうはどうするか。

「行く先々の学校へ臨時転入です。名古屋や京都で顔見世によく出ましたから、三年連続の転入でした。すっかりおなじみになって『待ってました！』なんて友だちから声がかかって仲良くなりましたけど、教科書開いてもサッパリわかんない。おかげで漢字もよく読めないし、計算も苦手です。でも東京へ帰って歌舞伎座のどんぼ道場で遊ぶときはとっても楽しかった。勘九郎さんは六つ年上で、ぼくの兄と同じ年ですけど、よく一緒にどんぼの稽古をしたものです。歌昇（当時光輝）

さんも一緒にした。あのころの坊ちゃん方は三階の子役とも交流がありましたね。今は子役から役者になる者もほとんどないし、今の坊ちゃん方は学校が忙しそうで、どんな道場で遊んだりはないみたいです」

ここで橋太郎は、少年俳優の勉強会「杉の子会」のことを突然思い出して語り始めた。

「『対面』が出たときのことです。勘九郎さんの五郎、時蔵(当時梅枝)さんの十郎、工藤は歌昇(光輝)さんでした。ぼくは近江小藤太で出て、稽古に小日向(勘三郎郎)へ伺うと、勘九郎さんが『ね、泊まっちゃいなくよ、明日ラジコンの飛行機飛ばしに行こうよ』なんて……。また、勘九郎さんとはやはり子役のころに『逆櫓』の遠見(遠景を表現するため、子役が大人と同じ扮装で演ずる)と一緒に出たことがあります。勘九郎さんが樋口でこっちは船頭ですが、ある日勘三郎旦那が『うちやぎちゃん、逆立ちできんだって?』っておっしゃるので『はい』って答えたら、『じゃ、楽(千秋楽)の日に遠見が終わったらあたし(本役の樋口)にかかっとく

れ』って。それで大人の船頭の中に混じってチビが權持って、ヤアーツ、って中村屋さんにかかってつた。そういう洒落たことがお好きでしたね、あの旦那は」

子役に「うちやぎちゃん」と呼びかける中村屋の甘い感じの口調を不意に思い出してなつかしかった。

「優しい方でしたね。中村屋の旦那って。そうそう、ぼくには小学校二年で見そめた同級生の彼女がいて(笑)、中学二年でプロポーズをして、二十二で結婚しましたけど、その彼女が十六のとき、名古屋へ芝居見に来たんです。ぼくは『寺子屋』の黒四天で出てました。松王の勘三郎旦那が『彼女来たのかい? よし、何かやらしてやろう』って。それで少しいい役に回してくれるのかなと思ったら『じやお前、先頭に出て首桶持ちなさい』(笑)。何だ、たいして変んねえや、と思いましたけど、でも嬉しかったです」

(エッセイスト)

五月の第二日曜日は母の日です。ご承知の通り、もともとはアメリカでキリスト教徒の間におこった行事ですが、一九二二年に日本に伝えられて以来、今ではもうすっかり私たち日本人の間にも浸透しています。

もちろん仏教でも、母親のみならず、父親の恩というものの非常に大なること、そして子供はそれに対して報いるべきであることが説かれています。例えば「スッタニパータ」という初期の經典には「両親が歳を老いて衰えているのに養うことなく、自分だけは豊かに暮らす人がいる。これは破滅への門である」という、お釈迦様の言葉がのこされています。

私たちは誰でも皆、父母がい

若和尚の

二 其 な い い ト ッ ヨ チ

たればこそ、この世に命を授けられたのであるから、自分たちのことばかりを考えずに父母に孝行を尽くしなさい、ということとです。そしてその気持ちを表そうというのがこの母の日の仏教的な意味と言えましょう。

各デパートではこの母の日に向けてのプレゼント商戦が熾烈に、そして賑やかに繰り広げられているようですが、もう皆さんは贈りものは決まりましたか。あれこれと悩んで選ぶのも楽しいものですが、本当に母親が欲しいと思っているもの、望んでいることは何かもう一度考えてみたいと思います。どんな親でも子供たちの健やかな成長を、そして立派な大人になってほしいという願いを持っています。

ならば自分はその願いにかなった人間となっているか、そのことを振り返り、見つめ直すことも大切と思われまます。

親の気持ちを思い、自分自身一生懸命に生きる。これが子供としての親に対する何よりの贈りものではないでしょうか。既にお浄土に往生されている父母も、どんなお供えものよりもそれを一番喜んで下さるのではないでしようか。

親にしてみれば子供はいつまでたっても子供だといえます。その意味では、子供にしてみれば毎日が母の日であり、また父の日であると心得なければいけないのかもしれない。

(正)

教育の現場から

子どもは「ありのままの自分を

まるごと受容してくれる人」を得たとき、

内面から「信愛」を育む

—「いじめ」の問題—

信

ゆつび小さな学園 代表
大妻女子大学大学院非常勤講師

内堀照夫

一、「仲間はすし」から 登校拒否になった事例で

これは、母親から、

「うちの康太は六年生です。おとなしくて、いくじのない面もありますが友だちには好かれていて、特に仲良しの子が三人いました。一月中旬頃から元気がない、風邪が疲れぐらいいに思っていたんです。学校へは行っていましたから。その内に大好きなすき焼きをしても、しらすを一本つまんで口に入れるぐらいの食欲になってしまいました。私（母親）が風邪で勤めを休んでいましたら私の布団に入ってくるんです。これはただ事ではないと思います。思わず頬ずりをしました。それを見た姉（中三）が『お母さんは康太に甘すぎる』と抗議しました。その時『学校へ行きたくない』と言い出したんです。いろいろな原因を知ろうとしましたがしやべりません。

日曜日に父親がドライブに誘い出して『お父さんは、おまえと同じ男だよ。おまえの気落ちはきつと分かる。おまえが苦しむようなことには絶対しない。話してごらん』と行っただけでした。帰途は『お姉さんも心配していたよ』と言ったらにつこりしたといいます」と。

康太の仲良しにABC三人がいた。三学期に入ったすぐの頃、たまたまBと二人で帰ることがあって「この頃Aは、つまなくなりました」ともらす。翌日、BがAに「康太が、おまえはつまらないからもう遊ばない」と言っていたと告げた。それを聞いたAは、B、Cだけでなく他の友だちも誘い込んで仲間にした。康太を相手にしない、無視する」行動にたのである。康太にすれば話のはずみでひょいと口にし、Bもそれを受けていたので気にも留めず、そのまま忘れてしまっていた。ところが、学校へ行ってみると何かがへんだ。バスケットボールの朝練習のときにも二

信

人で組んで練習をはじめると、誰かがやってきて相手を連れ去る。学校の帰りも一人になった。

父親は、日曜日であつたが失礼を省みず担任の先生に電話で状況を話して善処をお願いした。

翌日、夕食時の康太の様子を聞くと、先生は四人を呼んで、その間の事情を一人一人から聞き「なんだそんな詰まらないことで……、もうやめなさい。握手をして仲直りだ」と言われたので握手をしてきた。話し終つて康太は「……でも、あれで仲良くなれるとは思わないよ」とつぶやいた。

担任の処置が気にかかつて、この時点で相談に來たのであつた。

二、担任教師の対応はこれでよいのか

この事例で特に検討を必要とするのは担任教師の子ども達への対応である。この教師は

子どもを「單純な感情の持ち主」ととても思い込んでいるのだろうか。あるいは自分の発言を「神のお告げ」ととても過信しているのだろうか。「仲直りしなさい。握手をしなさい。元氣を出しなさい。頑張りなさい。反省しなさい」などの一言で指導し、処置してきたと思ひ込むなどは、思ひ上がりも甚だしい。例えば子どもであつても犯し難い「尊い人格」がある。その子その子それぞれに、流れを強めた感情のうねりをそう簡単に変えられるものではない。

古人の言を引くまでもないが、人を動かすには、山をも動かす氣概と命がけの覺悟がいる。この担任教師に限らず、多くの親も大人も「子どもの心を動かす」ことを容易に考えていすぎないか。

三、両親の対応はモデルである

一方、康太の両親の対応は親や教師のモデル

ルになる。幾つかを挙げてみよう。

○子どものシグナルを見落とさないで早期に発見している。

六年生にもなつて母親の布団の中に入ってきたりすると「なによ、赤ちゃんみたいなことをして」とはねのけるのが一般的ではないか。しかし、この母親は「これはただ事ではない」と受け止めている。

○事情を聞き出すのに工夫がある。

口を閉ざす子に詰問するのではなく「ここは父親の出番だろう」と判断してバトンタッチし役割を分担する。ドライブをしなからという設定も心を開きやすい。

○家族が連帯感をもっている。それが本人にも伝わっている。

この姉弟は、日常は喧嘩をしたり対立したり、時には「男のくせになによ。弱虫」などと言われたりしているのであろう。その姉も「心配していたよ」と伝えることで、康太はどんなに救われたことか。

○対応が速い。

日曜日でも躊躇がない。即座に担任教師に連絡して善処を依頼している。これは「休日に不躋ではないか」などといった形式的な虚礼ではなく、担任教師をパートナーと信じていることから発露した当然の帰結である。

○事後にも配慮がある。

翌日には、夕食時という家族の心がなごむ場面を選んで、康太の緊張を和らげながら様子と心境を聞き出している。

四、「いじめ」立ち向かう親と教師の姿勢

残念ながら、学校とその周辺で起こっている「いじめ」を学校教師が発見したり「いじめ」と判断したりしたケースはまれである。多くの場合、まず親・保護者が「わが子がいじめられている」ことを発見して担任に訴える。この時点で「いじめ」が表面化し教師によつては校長に報告することになり「いじ

信

「日帰り活動」から——ゲームづくりに取り組む子ども達



め」の件数に加算される。担任は、何等かの対処・指導を行う。

その対処・指導の結果が好転しないばかりか、かえって「いじめ」を拡大したり、陰湿なものになってしまったりすると、親・保護者の不安をつのらせ担任への不信感を生む。

再び、親・保護者は訴えてくる。担任としては、それなりの処置と指導をしているつもりだから「おたくの子にも『いじめ』られる原因がある」などと許しがたい発言する。

親・保護者は激怒し、担任では「頼りにならない」とみて、直接「いじめる子」の家に外向いたり、校長に面会を求めたり、教育委員会に電話をしたり、などという手段に訴える。

この段階になると、不確かな情報も飛び交い、感情論や立場論も加わって手に負えなくなる。

「いじめ」の事例で、担任教師と親・保護者が信頼関係で結ばれているケースが皆無に

「料理に挑戦」——おいしい和菓子を作るぞ



等しいのは、多くの場合このパターンの経過をたどるからに他ならない。

五、子ども達に何をして上げると、
「いじめ」をなくせるのか？

「いじめ」を引き起こす学級集団の人間関係の図式は、「いじめ」られる子、「いじめ」る子ども達、傍観する子ども達、無関心にいる子ども達の四つから成る。そして現にターゲットにされている子ども以外のほとんど全ての子ども達が「自分の保身のために」それぞれの関係位置を不安におびえながら「おしくらまんじゅう」さながらに保っていることと見ることが出来る。

このような学級の人間関係の在り方に疑問・違和感・恐怖を感じ、その中に在る自分に苛立ちを覚える感性の鋭い子どもに育て、出来れば何等かの行動を起こす子どもにしたい。例え「登校拒否」という手段であったと

信

しても。

解決へのアプローチとして次に挙げるが、これらは、四つの何れのグループに属している子どもに共通して指摘できることである。

(一)可愛がり愛してあげる。

いくつかの事例が裏付けていることであるが、愛された経験の乏しさから、愛することが得られる個々人がふくらむような感覚に浸ることが少ない場合に「いじめ」が起きやすい。

「いつでも僕(私)のことを想ってくれている。どんな時でも僕(私)を守ってくれる」など、

子どもは「現在の自分のありのままの姿をまるごと受容してくれる」人が自分の身近に居ることを感じ取れるとき、自己を尊重する「信愛」を内面に育てていく。

(二)「自信」自立」に向かわせる。

身近な人との温かい関係によって「信愛」を育んだ子どもは、「自信」自立」の課題に

向かう。これは、自分で思い立って計画し、自分で判断して実行し結果を掴む。一連の自発的活動の過程で起きる成功と失敗、挑戦と挫折、忍耐、苦難、再挑戦などの体験によって形成されていく。

成功体験ばかりだと「何事も自分の思うようにならないければ承知できない子」になってしまう。一方、失敗体験ばかりだと「自分は何も出来ないダメ人間」と思い込んでしまう。適時に、優しさに裏打ちされた適切な支援をして自発的活動を繰り返させ自己実現の道を歩み続けられる「自信」自立」を得させたい。

(三)「かけがえのないもの」を尊び畏敬の念をもたせる。

「かけがえのないものって何？ どんなにお金を出しても買えないものって知ってる？」ときどきこんな問いかけを子ども達にに応じてみよう。この地上には数限りなくさまざまなものが存在するけれども「か

「かけがえないもの」は、根源的には十指を越えることはあるまい。「かけがえないもの」が尊い人格に関わるものであることの理解を深め、だからこそ守り育てなければならぬとの認識が鮮明になるであろう。

四人間の値うちを多様に捉えさせる。

ペーパーテストの得点の高低など一喜一憂していたのでは「ゆつたりと自信をもって生きていく人間」には育たない。

むかしは、べいごまの名人がいた、カブト虫捕りのプロがいた、木登りの名手がいた、エッチなことの物知りがいた、つくり話のうまいのがいた、大人と話すのに遅れをとらないのがいた、鼻の利くのがいた、それらはみな一人一人の子どもの個性として際立ち仲間の中で貴重な存在として位置づけられていた。

むかしを懐かしんでいるのではない。現在の子ども達、その活動をじっくりと見ていると、一人一人が「その子らしさ、その子の持

ち味」を発揮している。それを相互に注目し合わせて認め支持し合う関係をもたせたいのである。

(五)形式的な「平等と公平」を排除させる。

遅刻して登校し、好きな授業だけに出席して、早退してしまうわが子を、「それがあなたに今一番合っているのよ。他の人は他の人でいいの」と心底認めて上げられる親が欲しい。六年生の学級で算数の時間に、かけ算九九の学習が堂々とできる子にしたい。学級成員のみんながあざ笑ったときでも「今の僕に必要な学習はこれなんだ」と胸を張って応えられる子どもにしたい。

わが子が「友達がからかう」と訴えてきたとき、毅然とした態度で行為の正当性を納得いくように論じてあげられる親になれないものだろうか。

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

日本編

二

● 奈良の六宗

前述のように、日本に仏教が伝来して間もなく、浄土教の芽生えがみられるのですが、しかし日本の場合にも中国と同じで、仏教伝来の当初は雑然とした信仰形態なのでありました。信仰対象としての仏様も、釈迦・弥勒・薬師・観音、そして阿弥陀といった諸仏が、特別な教義に固定されることなく礼拝さ

れていたのでありまして、阿弥陀仏も弥勒仏も区別されなかったような形跡があると、学説されております。

聖徳太子が仏教の普及に力を入れたのは、統一国家を支える精神的原理としてこれが必要だったからでした。それまでの日本には氏神の崇拝があったわけですが、氏神は氏族の利害と結合しているわけです。統一国家というのは、氏族制度の地方分権を捨てて、

統一的中央集権をはかる必要があるわけですから、それにふさわしい普遍性のある宗教がなければならぬのです。

仏教はそうにして日本に定着したのですが、それが奈良時代になると、統一国家を護る、いわゆる鎮護国家の宗教へと進んでいくのであります。そのため仏教は国家機関として統制化されるのですが、教義の研究熱も高まってきた、とくに唐からの帰朝の留学生（ルガクシヨウと読む）たちの動きもあって、日本にも六つの宗派が成立するのであります。法相宗・俱舎宗・成実宗・三論宗・華嚴宗・律宗などですが、これらは宗とはいっても、今日みられるような宗とはちよつと違っておりまして、仏教学研究の学派のようなものであります。一人の僧が二宗以上を兼学し、寺院は複数の宗を兼ねる道場でもありました。法相宗というのは、一切のもの（法のありのままの姿（相））を学ぶのであり、俱舎宗は世親菩薩の『俱舎論』（存在論を述べ



た書）を学ぶのであり、成実宗は空の理を説く『成実論』を学ぶのであり、三論宗は空の哲学書『中論』『十二門論』『百論』（これを三論と呼ぶ）を学ぶのであり、華嚴宗は『華嚴経』を学ぶのであり、律宗は律典を学ぶのであります。

●奈良時代の浄土教

さあ、こうなると、念仏はどこへいつてしまった、弥陀浄土信仰はどこへいつてしまったということになるのでありますが、それがまた、ちゃんとあるのであります。そこを、前に紹介したことのある凝然大徳の『浄土法門源流章』で見てみることにしましょう。同書の「大日本国浄教弘通次第」に次のようにあります。

「昔、百済の仏法創て日域に伝わりて、大唐の仏宗次に此の国に伝わり、三論・法相世間に弘布す。その後漸次に諸宗流転す。浄土の教観別宗と為さず。各々自宗に随つ



て法義を解釈す。昔、元興寺の智光・礼光、各々三論を弘め兼ねて淨教に通ず。法相の昌海、安養を欣樂し西方念佛集一卷並びに阿弥陀悔過を撰す」(原漢文)

即ち、奈良時代にあつては、念仏の法門というものは、一つの宗派とはなっていないが、いろいろな宗派に付随して存在していた、というのであります。これは非常に重要な指摘だと思ふのであります。

と申しますのは、中国に於いても、仏教渡來の当初は、雑然とした信仰形態だったというのを前に述べておきましたが、日本もまたそれと同じだったのであり、つまり異教としての仏教が入ってきた当初は、雑然としていたのは当り前のことだったのです。宗というものができて、前述のように兼學するということが普通だったのです。

そういつたなかで、念仏は、それぞれの宗派に付随して行われていた、これは念仏の普遍性を物語るものでありまして、仏教の底流

に必ず念仏があるということとは、ここでも証明されているわけであります。

この頃また、中国や朝鮮の淨土教関係の經論が多く流入され、教義研究に拍車をかけるようになるのですが、それら伝來の經論名は正倉院文書に見ることができるとです。

そしてここに、ぼつぼつ、淨土信仰についての書物を著わすような方が現われてくるのであります。その先駆けをなす方が『淨土法門源流章』に教示されてあります智光師であります。以下智光師について述べます。

● 智光師の信仰

智光師(七〇九—七八〇頃)は河内(大阪府)の人で、九歳で出家し、元興寺の智藏師について三論を学び、はじめ鋤田寺に住し、のち元興寺極樂坊に入り、また仙光院に転じました。同門の礼光(頼光とも)師と仲が良く、共に三論を顯揚しましたが、同時に深く阿弥陀淨土教に帰依し、極樂淨土を願ひ求

めたのでした。

兩人の浄土願求は並大抵のものではなかったようて、礼光師などは部屋に籠って弥陀浄土のことを観察し、人々と一切話をしないという無言の行を行じたというのです。そうして数年後に大往生されたのでした。

ところが、親友であった智光師は、夢で礼光師が極楽に往生したことを知ったのであります。そこでその極楽浄土の様相を画工に描かせ、極楽坊に掲げたのでした。これが世にいう智光曼荼羅ちこうまんだらといわれるものであります。

虚空・宝楼閣・宝池の間に阿弥陀三尊と二十四菩薩、それに二比丘びくを描いた簡潔なものでした。一尺余寸四方の小さなものだったそうですが、宝徳二年（一四五二）の土一揆で焼失し、今は転写本のみですが、浄土念仏信仰が、このような形で現われてきたことに注目する必要があると思うのです。この曼荼羅がこのような小さかったということは、おそらく部屋に掛けまつて、個人的に浄土を観想



したことが考えられ、鎮護国家といった国体仏教色のなかに、個人選択の自由信仰が出てきた、それが浄土教であったということが重大なのであります。

智光師はまた、『無量寿経論釈』五卷、『観無量寿経疏』一卷、『四十八願釈』一卷などの浄土教論を著わしておられます。他に般若経や法華経に関する論も書いておられますが、浄土教に関しては、阿弥陀如来の第十八願というものが、悪人往生に対する救済の願であることに注目するなど、日本における、浄土教教学の本格的な第一歩を踏み出されたお方といえるのであります（石田充之『浄土教教学史』参照）。

●昌海師その他

次に『浄土法門源流章』に記す昌海師しやうかいのことですが、この人の名は浄土宗の辞典にも出てきませんので戸惑う方がおられるかも知れませんが、井上光貞博士の『日本浄土教成

立史の研究』によりますと、昌海師はおそらく延暦十五年（七六九）に寂した人で、興福寺の善珠ぜんじゆの弟子らしく、『西方念仏集』『阿弥陀悔過』のほかに『往生集』の著書もあったらしいのであります。善珠師については、最近の仏教事典などに、弥勒みろくの浄土を願った人というふうに記載されていますが、井上博士は、善珠に『無量寿経賛鈔』や『無量寿経註字釈』（各一卷）の著書があること、唯識ゆいしきのことを書いた『唯識義灯増明記』の序文に「共に西方安樂国に生ぜん」（原漢文）とあることなどを指摘して、弥陀浄土信仰者であったと明言しておられるのであります（前掲書）。



● 浄土曼荼羅

このようにして、奈良仏教にも念仏信仰が着々と育って行くのであります。そして奈良朝後半には、阿弥陀仏像や阿弥陀浄土曼荼羅（曼荼羅）（変相図）が数多く作られるようになるのであります（大野達之助『上代の浄土教』参照）。また阿弥陀仏をおまつりする阿弥陀堂も建てられました。阿弥陀堂が建てられた理由の一つには、阿弥陀悔過ということがあるのです。先に昌海師が『阿弥陀悔過』という著書を著わされたことを記しましたが、悔過とは罪過を懺悔することであって、阿弥陀悔過とは、阿弥陀仏の前で懺悔する法なのであります。他の仏様の前で行なう場合もあって、例えば薬師如来の前で行なう場合は薬師悔過といひます。阿弥陀悔過のちに天台宗や真言宗へも流れていきます。

阿弥陀浄土曼荼羅については、先の智光師のものの外に、当麻曼荼羅（たいま）が有名であります。

これは天平の頃（奈良後期）中将姫が蓮の糸で織りなしたと伝説されるもので、実際は絹糸ですが、破損した断片しか現存しておらず、奈良県当麻町の当麻寺にあるのです。ただし文亀年間（一五〇一—一五〇四）の模写図が、あつて詳細が分かるのですが、『観音量寿經』の所説を忠実に描写した貴重なものです。中国では唐代に善導大師がこの曼荼羅をたくさん作られたといわれますから、その流れのものと想像されますが、浄土宗のお寺までは、お彼岸にこれをかけるので、拝まれた方も多いと思います。（平安中期には、堂陸出身の清海という僧が、大和の超昇寺に入って曼荼羅を作ったが、これら智光曼荼羅・当麻曼荼羅・晴海曼荼羅を、日本浄土三曼荼羅という）

● 行基菩薩と鑑真和尚

奈良時代には行基菩薩や鑑真和尚など有名な方々がありますが、この方々にも念仏信仰があったとされているのであります。行基菩薩は



法相宗の方で、河内の百濟帰化人の家系出身だそうですが、諸寺を建てたばかりではなく、道路修理・堤防築造・橋梁架設・貯水池設置など、広く社会福祉事業に身を挺されたお方で、菩薩と崇められているのです。その『行基菩薩行状記』に、「夜は通夜群郷の境を逃れて、高声念仏を唱えて長夜迷妄の眠りをさまし、昼は終日諸人の門戸に趣きて、浄土の文理を講讀し、往生淨刹の安心をさずけて愚昧の輩を利益し給いき」とあるのであります。ために『望月仏教大辞典』にも「浄業を唱ふ」と記されているのです。浄業とはお念仏のことであります。

鑑真和尚は唐の人、幾度ももの失敗にもめげず、その間失明したにもかかわらず六度目で渡日を成功させたという高僧で、映画にまでなつて業績を賛えられておりますが、日本に正しい律（仏教の戒律）を伝えた方であります。この方の伝記によりますと（『本朝高僧伝』『招提千載伝』など）、西方に向つて結跏

趺坐（ふざ）（仏様の坐法）して入寂されたところの
であります。よって和尚が、弥陀の西方極樂
浄土を仰慕されていたことが分かるのであり
ます。

● 天台浄土教

時代は奈良から平安時代へと進みます。平
安時代になると、浄土教はいっそうふくらみ
を見せてきます。

平安時代は中国から天台・真言の両宗が伝
えられて根つき、平安仏教の名で呼ばれてお
りますが、この両宗の中にも浄土教は大きな
流れとなって発展していくのであります。と
くに天台宗には「天台浄土教」という言葉が生
まれるほど念仏が盛んになりまして、その本
山である比叡山では、朝に「法華経」に基く法
華懺法の勤めをし（懺法とは懺悔を行なう法
会）、夕方には阿弥陀仏を拜して「南無阿弥
陀仏」とお念仏を称えたから、「朝題目夕念
仏」という言葉さえ生まれたのであります。



だいたいがして、中国での天台の祖智顗師
（天台大師とも智者大師とも）は、メインは
法華信仰ですが、別に強大な浄土念仏信仰も
もっておられたのでありまして、亡くなられ
る時は、専ら弥陀・観音・般若の名を称え、
弟子に「法華経」と「無量寿経」の題目（題
名）を唱えさせ、四十八願莊嚴浄土（弥陀の
浄土のこと）に往生する道理を説いて息絶え
られたのであります。ですから天台宗の大学
者であられた叡山学院名誉教授山口光円先生
は、その著『天台浄土教史』の中で、智顗師
の「自内証は浄土教であった」といってお
られるのであります。自内証とは心の奥底の
信心のことです。

ですから、日本の伝教大師（最澄）日本
天台宗開祖 もまた、弥陀信仰をもっておら
れたのであり（右書参照）、法然上人や親鸞
聖人もそのことを指摘しておられるのであ
ります。

（つづく）

世俗を離れて、はやいもので二年が過ぎようとしている。

いまでも世俗、といっても普通の株式会社だったその会社に勤めている同僚たちや、上司だった先輩に、何か事あると会うことがある。

すると、もちろん彼らは私が転身、お坊さんになった、ということを十分承知しているのに、それでもその度に、「だんだん坊さんらしい顔になってきた」と、にこにこしながら、顔をのぞき込むようにして言う。現役サラリーマンが昔机を並べたもとサラリーマンのお坊さんに。

顔をまじまじと見られるのはあまり好きではない。だがこう言われると、自分が選んだ新しい世界に馴染んできたわけで、

悪い気はしない。それどころか、自分がお坊さんの世界に飛び込んで、最初に感じたこともこのことなのである。

「お坊さん顔」の存在だ。

そう、お坊さんならではの顔付きがあるということだ。

会社に行ったころは仕事柄もあり、様々な業界の人にあつた。

そしてお坊さんの世界に。会うお坊さんお坊さんが皆同じ顔に見えた。坊主頭であろうが、長い髪であろうが、その顔付きや表情や眼差しが皆同じ優しさをたたえているのである。しかも浄土宗だけに限らない。

もちろんなかには一見、これがお坊さん、と目を見張る人もいないではない。だが会っているうちに、しばらく顔を見てい

◆◆ お 坊 さ ん 顔 ◆◆

るうちに、ああ、この人もお坊さんの顔だと納得してしまう。

もともとのお坊さんは特殊な社会をつくる集団ではあった。だが朱に交われれば赤くなるというだけで、同じ顔にはなるまい。それでは会社が顔付きだけで分類されてしまう。すると何がお坊さんをお坊さん顔らしくせしめるのか。読経の功德か、生活スタイルのせいとか、お坊さんならではの何かが、そうさせているはずなのだが……。

そんなことをいつも考えながらお坊さんの中にいる。お坊さん顔になぜなるか。

日に日にお坊さん顔に少しずつなってきたらどうだろう自分の顔突き出して、会社時代の友人に今度聞いてみよう。(Y)

表紙は語る

共に生きる

ブナ原生林から

●
本誌表紙写真／文
御所野洋幸

森は水を貯え、土壌を作る。

地球温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、鳥獣を育て、プランクトンや虫の育成まで行ない、結果的には魚類も保護している。

その森の働きの要、それがブナの原生林なのだ。

樹齢150年のブナ1本で、約8トンの水を貯え、ヘクタールあたり年間10トン近い葉を落とすという。

雨が地表を走ることを抑えて洪水を防ぐブナ。果実は鳥獣を養い、落葉は土を肥やし、山菜や他の野草を育てるブナ。森の母、森の医者と呼ばれるブナ。そのブナと共に生き、写真を撮り続けるひとりの写真家がいる。



山が笑う

天然記念物に指定されている野鳥 クマゲラを確認した、と教育委員会に勤めている宮野氏から知らされた。

私はまだ見たことはない。

クマゲラは日本最大のキツツキで体長およそ四十五センチ。カラスほどの大きさで全身が黒く、オスは頭部全体、メスは後頭部が赤く、目の黄色とくちばしの灰黄色が目立つという。おもに北海道に生息している。本州で確認されたのは、今のところ白神山地と、ここ奥森吉だけである。クマゲラは枯れた立木で太くスマートな大木に巣穴を作る。地上から十メートルほどの高さに縦に長い楕円形で、縦約十七センチ、横十センチの玄関を作り、奥は六十五センチの深い穴になっているという。

あと十分ぐらいで巣穴の近くに行けると思つた時、『

鈍い、重いひびきが一定の間隔で聞えて来た。クマゲラのドラミングだ。時々吹く風で枝のふれ合う音しか聞えない林の中で、重く力強い音は際立っている。望遠を付けたカメラを首に、静かに進む。ドラミングが止った。巢穴のそばである。十分、十五分、三十分、ほとんど動くことなく待つてみたが、クマゲラは姿を見せない。残念である。カタクリの花があちこちで笑顔をみせている。

山が笑う。山で働く人達が言う。春紅葉のこの時季、私の一番好きな季節である。(四月下旬から五月中旬)

五月も半ばになると、葉芽も花芽も寒さを乗り切るための硬い赤いコートを脱ぐ。

ブナの葉は二、四センチ程で産毛に被われ、全体が柔らかで下に垂れ、少しの風でもヒラ

ヒラゆれていつせいにオシヤベリをしている
 ようなにぎわいだ。赤いカエデの花でウグイ
 スがさえずり、フキの塔、カタクリの花、イ
 チリン草、水芭蕉の花、昆虫、それぞれの生
 物が動き出し、林の中は活気に満ち、新しい
 生命の喜びを感じさせる。

五月十六日、中谷地区に入って湿地帯を進んで行くと、目の前一面が水芭蕉の花だ。

その真中に大きなブナの枯れた老木、根元からは若木が伸び、土に変わりかけた落葉のところどころに小さなブナの子供達。まわりの林からは『ケキヨ、ケキヨ、ホーケキヨ』。水の音、自然の微生物の香り、コケがある、虫がいる、鳥がいる、岩魚が背ビレをだして水芭蕉の間を泳ぎ回る。

森の生命の鼓動が春の香りと一緒に私をつつむ。思わず『ヴィヴァルディの四季』を口ずさむ。

それぞれの生物は他の生物の恩恵をうけ、

また他の生物に恩恵を与えている。そして共に生きている。この自然のメカニズム。食物連鎖と、陸上で最も大規模で円滑な物質循環が、解りやすい形ていま目の前に広がっている。

それにしてもなんと美しい景觀だろう。枯れた老木に向って回りの木々と、鳥たち、水と、水芭蕉の大コーラスだ。老木への讃美歌だ。その日の日記には、真中の枯れた老木を神木と記した。私の敬虔な気持を表わす術はそれしかなかった。

快晴にめぐまれた翌日、朝から神木のそばに行き、知っている限りの歌をくり回し歌い、お昼を食べ、小高い所に横になり、暖い日ざしのあるあいだ、その場を動かなかった。

花のある杜

花のある杜に行つて来た
誰も一緒には行かなかった
長い間ひとりそこにいた

この上なし仕合せなものであった
花のある杜では

地には 草があり
木には 葉があり
それから風は音をたてた
とても清らかな
楽しさで

かくわたしは
仕合せだった
この上なしの仕合せだった
花のある杜では

(佐藤春夫、詩集より)

先人の音楽家や、詩人の表現力に感服し、
自然の中に染り、生ある今を喜び過した一週
間であった。

ティク・ナット・ハン
について

戸松義晴氏に聞く

ベトナム生まれの詩人・仏教者
ティク・ナット・ハン

ティク・ナット・ハンは、1926年生まれ。ベトナム戦争に対し、「行動する仏教者」の一人として非暴力・平和を訴え、その結果亡命を余儀なくされました。1973年以降、彼はフランスに在住し、難民救援活動に携わるいっぽう、欧米の人々に仏教思想のエッセンスを伝えることに心をくだいています。平明で、美しく魂に響く言葉と、現代人向けに工夫されたやさしい瞑想法によって、彼の思想は多くの人々の共感を得ています。

そしていま、地球レベルの諸問題——環境破壊、南北問題、核、戦争など——に対応するための思想・行動の体系として全世界的に仏教が注目され、「地球仏教」という概念が生まれるに至っていますが、ティク・ナット・ハンは、ダライ・ラマと並び、その代表的指導者として評価されています。

蓮の花になる ひとりひとりが

インタビュー

このインタビューは、一九九五年三月に行なわれました。

〈編〉ティク・ナット・ハン師が今回来日され、四月二十九日の大阪を皮切りに五月十四日の鎌倉光明寺まで、五ヶ所で講演などを行われるというのですが、まずハン師のご紹介をお願いいたします。

戸松 わかりました。

ティク・ナット・ハン師は、一九二六年生まれのベトナム人で、十六歳の時に出家し僧となりました。一九五〇年にメディテーション道場を創設し、ベトナムで初めて外国の文献を原語で勉強する仏教研究所を創りました。また六一年から六三年の間アメリカに留学して仏教と比較宗教学を勉強しています。

アメリカ留学から帰国した頃にベトナム戦争が勃発しました、彼は僧院の中で修行を続けるべきか、それとも僧院を出て爆撃に苦しむ人々のために行動すべきかを考えた末、その両方を行なうことを決意し、エンゲージ

ド・ブツディストという、社会に関わった仏教、あるいは行動する仏教という言葉掲げまして、被災者や難民の救援活動を行いました。

ハン師は最後まで中立の立場を守り通しました。結果、北ベトナムの方からは、CIAの手先といわれ、南ベトナムからはベトコンの手先だといわれて、両方から攻撃されることになりました。そんな中でも、仏教社会福祉青年学校、ヴァン・ハン仏教大学、ティエブ・ヒエン教団などを設立しました。

そして一九六六年に渡米し、平和実現のために各地で講演を行い、ハン師のスピーチは非常に多くの人に感銘を与え、高く評価され、受賞はしませんでした。キング牧師からノーベル平和賞に推薦されました。更に一九七二年のパリ平和会談にも参加し、和平に尽力しました。しかしベトナム国内では、戦争中に協力しなかったということで追放処分を受け、現在も帰国を拒否されています。



《編》 追放処分を受けたということは亡命者ということですか。

《戸松》 形の上ではそうかも知れませんが、ハン師自身には亡命者という意識はないですね。現在はフランス国籍を持ち、南フランスにプラム・ビレッジというサンガを造り、そこを拠点として、自然農法による自給自足の生活をしながらベトナム仏教を伝えています。

《編》 そこに集まっている人達は仏教者ということですか。

《戸松》 基本的にそうです。ベトナム人だけではなく、世界中から弟子になるために、あるいは修行しにやってきて、仏教の教えを中心とした生活をしています。

現在このプラム・ヴィレッジを中心としてハン師や弟子の人達が、世界中に在るベトナム難民のキャンプや孤児達をサポートするプログラム作りや具体的な活動を行っています。

《編》 それは共同体の主目的なのですか。

《戸松》 違います。全然違います。

《編》 主目的としてはあくまでも仏教徒の共同体というか、

《戸松》 そうです、実践ですね。仏教の教えをそこで体得して、生活の中に生かしていく。決して社会事業や社会活動のための集合体ではありません。

《編》 いわゆる教団のようなものですか。

《戸松》 教団とはまた違いますね。

まず自分自身の心がピースフル、平静になることからスタートします。それ無しで人を助けたり社会活動をするというは全く無意味であるというのがハン師のスタンスですから、まずその基本を学ぶという場所ですね。

更にハン師は、年に一度必ず世界各地を訪れ、講演やリトリートを行っています。

《編》 リトリートというのは修行ですか。

《戸松》 修行じゃないですね。マインドフル、安らぎとくつろぎという、まあ安居あんごですね。

《編》 日本でいうところの安居にあたるの。

《戸松》 全く安居です。普段の生活から離れ



て特別な行の期間を持つということですね。

最初はアメリカやオーストラリアなどに在るベトナム人の難民キャンプを訪れて、カウセンリングというが、ベトナムの伝統的な価値観あるいは仏教に根ざした方法で人々の救済、教化にあたっていました。その後、ハン師の著作が英語で出版されたりして、その活動が知られるようになり、ベトナム人以外にも求められてダルマ・トークという講演会や、リトリートなどの布教伝導を行うようになりました。

特にアメリカでは、ベトナム戦争の被害者はベトナム人だけではない、アメリカ人も同じなんだという事で、ベトナム戦争で精神的に傷を負った元兵士のために、ボランティアでカウセンリングなどを行っています。

〔編〕先ほどハン師の著作のことを話されましたが、どのくらい出版されているのですか。
〔戸松〕ハン師の著作は、世界で一番読まれている仏教書なんです。師の本は易しくて誰

にでも受け入れられるものなのです。

〔編〕世界で一番読まれているというのは出版点数発行部数が多いということですか。

〔戸松〕もちろん単著としての出版数も多いし、仏教聖典のようなものを除けば、一番多くの国の言葉に翻訳されているということです。
〔編〕ハン師はご自分を仏教者といわれていますが、僧とは違うんですか。

〔戸松〕彼自身は仏教者という意識だと思えます。ハン師は人の前に付く形容詞、何々人だとか、富豪、貧者、仏教僧などのように人々を差別化、あるいは区別化するような形容詞は、意味をなさない。自分は仏教者の一人に過ぎないという立場ですから、僧というより仏教者という方が相応しいと思います。

〔編〕戸松さんはハン師とどのようにして出会われたのですか。

〔戸松〕私が八八年から九一年までハーバード大学に留学しているとき、日本という教科書として先生から推薦された本の中に、必ず



ハン師の著作があったのです。町のどの本屋の仏教書コーナーにも必ずハン師の本があり、誰よりも多くのセクションが設けられていました。私が知らないだけで、かなり有名で多くの人に読まれている本に違いないと思います、手に取ってみると、タイトルも『ビーイング・ピース』『ワンダフル・モーメント・プレゼント・モーメント』とか、非常に良い感じで、中を拾い読みしてみると解り易く心に響くようなことが書いてある。そこで試に一冊買つて読んでみたら、自分の云いたいこととフィットしたんです。そのうち授業で、ブッディズム・アンド・ソーシャル・チェンジというコースで、社会変革と仏教との関わりを歴史的かつ地域的に勉強しているときに、アジアの仏教者としてハン師の「オ・アウエー・リング・ベル覚醒の鐘」というビデオが教材として使われました。そのビデオを観ることで、本を読んで受けた感銘がより一層深くなりました。

一九九一年の春にボストンでリトリートが

行われ、ハン師の弟子でもある同窓生のトリアンというベトナム人と共に参加する機会がありました。そのリトリートは大変な人気で、大学などに貼り紙をする程度の宣伝しかしていなかったんですが、朝十時から始まるのに七時頃には大きな体育館がほとんど殆ど一杯というほどでした。そこに来ている人達は、大学院の学生とか先生、学者など、インテリの人達を中心です。

リトリートが終わって別の日に、ハン師が泊まっているベトナム人の家に友人が個人的に招待され、幸運なことに私も同席することができました。夕食後お話をする機会があり、まさに本に書いてあることを本当に実践しているというのが、一瞬にして私に伝わってきました。仏教の本質が話さずとも伝わってきました。要するに本物といえますかね。本当に人間に付く形容詞を抜いて人に接しているということも身をもって示している。お坊さんの在るべき姿を感じたというか、できることな



ら自分もそうなりたいと思いましたね。

それが私とハン師の出会いです。

〔編〕その出会いをきっかけとしてハン師の来日に尽力されたわけですね。

〔戸松〕はい、私自身非常に感銘を受けまして、実はその時にぜひ日本に来てほしいということをハン師にお話ししたんですが、その

時ハン師は、「私は日本の仏教者の人達に本当に心深く失望しました」そういわれたんです。

日本の仏教者、まあお坊さんのことなんです。ベトナム戦争の時に、ハン師はアメリカに行く途中で日本に立ち寄り、日本は同じ仏教国であり経済力もあり、アメリカとも近い関係で影響力もある。ぜひ仏教者として平和のために働きかけをしてほしいと日本の偉いお坊さん達と会って訴えたのです。その時にはみんなからいい返事を頂いたのですが、実際には言葉だけで何の働きかけもしては貰えなかったということでした。

ハン師が日本の仏教者に失望したと云われ

たのはすごいショックでした。

でも確かにおっしゃられることはその通りなところがありますから、ぜひまた日本に来ていただいてお話しをしていただきたい。

特に一般の人よりも日本のお坊さん達にハン師の話を聞いて貰いたいと、そのときから願っていました。

〔編〕マインドフル事務局という団体ができ、今回来日を実現したということですね。

〔戸松〕今回の場所の選択に関しては、ハン師の方から、静かで、人が大勢入れて、自然が在って、宿泊ができる、そういう場所を見つけて下さいという要望がありました。

そこでリトリートの他に講演会をしていた

だくこととしてスケジュールを企画しました。ダルマ・トーク、講演会としては、四月二十九日に大阪吹田市のメインシアター、五月九日に東京のよみうりホールで。四日間から五日間の安居、リトリートの場所として五月三日から七日まで伊勢原の思親会、五月十日



から十三日までは清里のキープフォレスト
ズキャンプ場で。更に四月三十日には京都比
叡山の居士林、五月十四日には浄土宗総合研
究所主催で鎌倉の光明寺、この二ヶ所でマイ
ドフルの一日を開催します。

一人でも多くの方に参加していただきハン
師に接していただきたいという思いで、「ダ
ルマ・トーク」という夜の講演会、「マイン
ドフルの一日」というリトリートの一日版、
四日間と五日間のリトリートを企画しました
ので、ご自分のご都合にあった会場に足を運
んでいただき、ぜひハン師のお話しを、ある
いは実際にハン師と共にメデイテーションを
経験していただきたいと思います。

〈編〉ハン師の教えの中心といいますが、何
か戸松さんご自身が印象に残っている言葉な
どがありましたらご紹介下さい。

〈戸松〉ハン師の特徴は、誰にでも解り易く
仏教を説くことにあります。その中で特に私
が印象深いお話しをひとつご紹介しましょう。

リングをひとつ置いて、一体このリングの
中に貴方は何を見ますか。ハン師の考え方、
インタービーイングですね。「空」のとらえ
方。要するに「空」をもってリングを見て、
そして貴方が何を見たか書いて下さいとい
うのです。

リングの中に青い空があつて、雲があつて、
雨があつて、土があつて、それを作る人々と
その生活があつて、リングをここまで運ん
でくる過程があつて、売る人が居て、買う私
達が居る。そう書くと七十点ぐらい。

その後があつて、そのリングを私達が食
べるといふこと、そして美味しいと感じたなら
ば、私達はリングの中に見えたすべてのもの
に対して責任がある。強い関わり合いがある
と。だからその中に起きるすべての問題は、
実は私達に深く関わった問題なのだといふこ
とです。それが一番印象に残った言葉ですね。

〈編〉五月十四日には浄土宗総合研究所の協
力で、浄土宗の大本山である鎌倉の光明寺で





リトリートの一日版を開催されるのですね。

〈戸松〉私は法然上人とハン師は本質的にすごく近いと思っています。それはどういふことかという、法然上人自身が、仏教の教えや修行の形が、どれほど深く、そして整ったものであっても、それで人々が実際に救われるわけではない。教えそのものが人々の心に響くものでなければ意味がない。要するに、仏教を伝えるためにお念仏を説いたのではなく、人々が実際に救われる、あるいは少しでも精神的に安心を得る、そのためにお念仏を説いたのだと思います。

ハン師もまったくその通りで、人々に理解できないパーリー語のお経を読むだけではなく、直接にお話することなどに重点を置いて、誰もが生活の中で経験できるような形で教えを伝えていく。常に人間を見つめて、人々を苦しみから救うために何が大事なのかを考え実践していく。

ハン師の言葉で、「まず自分自身が微笑ま



なくてどうやって人に微笑み返すことができればか」というのがあります。仏教的な精神で先ず心を確立し、その上で社会と関わっていく。自分と社会とは切り放せないものなのだから、他の人が救われたということがなければ自分の救済もないという大乗的な考えなのです。

〈編〉マインドフル・プロジェクト事務局というのは、最終的にはハン師の主催するフランスのプラム・ビレッジのようなものを日本で創ることを目的としているのですか。

戸松 このマインドフル・プロジェクト事務局というのは、あくまでもハン師を招聘するために創った集まりで、それぞれが個人的にハン師と関わりはありますが、今まで個々には面識のない人達の集まりですが、本質的には仏教の教えに基づいたサンガのようなものを造っていくということ。それが生活の中に仏教を実践していくことになるんじゃないかと考えています。

要するに私達は、仏教を生活の中で実践していくという者達の集まりなんです。

私自身のことでいいますと、お念仏を唱えて、自分自身の心が静かに、安心といいますが、ピースフルな気持ちになって、それを今度は自分の周りに居る家族に伝えて、そしてそういう輪が少しずつ広がっていった。

形だけの念仏ではなくて、念仏によって少しでも安心を得たらその安心を得たということとを行動を通して多くの人に伝えていく。

私はそういう中から起こってくる具体的な行動を通じてこそ多くの人とお念仏の縁が結ばれていく。あるいは法然上人の本来言おうとしていることが多くの人に伝わっていくのではないかと思います。

ぜひ五月十四日に鎌倉の光明寺で行うマインドフルの一日に参加して下さい。そして、ハン師のいう、「ひとりひとりが蓮の花になる」時間を味わってほしいと思います。





FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
とどし編集部にお寄せ下さい。

■ 誌 上 歌 壇 ■

略 懺 悔

—— 息子へ ——

われら既に究竟の船に乗りこめど直下の海の青深き揺れ

観念の念にもあらず迷いこむ暁闇の仏具屋の逆さまの木魚

匿名希望・蓮門小子

この都市の風に微かな念仏の声聴きとりているは確かか

懊悩は尽きねどきみの僧形の烏に似たる姿を愛す

さらば童子、額に当てて剃刀を引けば朱に散る晨朝無常偈

内陣のすべての水は凍れども花々冴えて今日御忌である

誌 上 投 句

花万朶念仏行脚に会ひにけり

小さき手にわが手重ねて彼岸詣



変身の目をつむりゐる木下闇

むらさきの風の狂乱藤の花



寺町の薨に映えて幟立つ

越後路の植田のひかり神宿る

吉田ゆきゑ (東京都)

児玉仁良 (埼玉県)

児玉良男 (静岡県)

句会便り

《貞源寺句会》

(年間4回開催、うち1回は吟行)より
平成5年、6年の互選による優秀句

花馬酔木廂を深く寡夫栖む

対面の五郎の見得や初芝居

居酒屋に鏡開きの餅少し

良吉

春愁や女患者の唇赫く

パナマ帽斜めに直し扉押す

清虚

椰子の浜に時差もて年の改まる

罪めきし話さらりと花まつり

紫陽花の吐息雫の重さほど

智恵

かすれたる筆ひとはきの夕立かな

哲郎

日溜まりの猫の長さや春となり

芳清

《西念寺句会》

(不定期開催、吟行多し、「月天」同人主体)
平成六年「句海浄土」より

炎々と花は眠らず夜深し

花風吹き袂遊ばせ漫ろゆく

誰れかれと挨拶交わす桜路

思い出のためになど散るな桜

木蓮の散るこちする午睡かな

菜の花やメガネをはずす夫の皺

初夏や遠くにゆれる赤い帽子

じゃがたらの花の新宿副都心

逝く春や乳首に似たる菜子の列

はつなつや素甘に惑う指の腹

啞々砂

魚夢

白々

敦美

八千代

文雄

烏鷲

復刻版
『縮冊』
法然上人行状画図



当会理事をされている神奈川
教区・横須賀正観寺住職、宮沢
善弘上人は、昨秋の大本山光明
寺におけるお十夜法要の唱導師
のご大役を勤められました。そ
の記念として発刊されたのがこ
の復刻版『縮冊 法然上人行状
画図』です。

小田原市板橋の常光寺（住職
松島定宣上人）。その第二十二
世・梶實順上人（一八六四—
一九二〇）の御名をご存じの方
も多いことでしょう。実はこの
本は布教伝道に尽力された梶上
人が明治四十一年（一九〇八）
に宗祖七〇〇年御忌に際して記
念出版されたものであります。
宮沢上人のご先代はこの第四版
を知恩院からの褒賞の記念とし
て賜わり、常にご布教の支えと

し携帯されていたそうですが、
宮沢上人もまた、二十年来ご愛
用されているとのことでした。

この度同書を復刊されたのは
梶上人のご趣意を「現代の布教
の根源を元祖上人の『御伝』の
裡に求めよ」ととらえられ、多
くの方に手にして頂きたいとお
考えになった宮沢上人の志によ
るものです。

六十以上の絵が挿入されて
いる同書には、詳細な縁起、索
引、年譜も附されていて利便を
極め、布教伝道に一生涯を捧げ
られた梶上人の御心が伝わって
くるようです。特に本宗教師に
とっては必携の書と確せるもの
としてここにご紹介致します。

●当会顧問・大田秀三師、御忌会唱導師を

前・浄土宗宗務総長、現・大正大学理事長で当会の顧問の任にもつかれております、群馬教区高崎組・安国寺住職・大田秀三上人が、四月五日、大本山増上寺での御忌会日中法要唱導師の御大役をお勤めになりました。

当日は穏やかな天気に恵まれ、ほのかな紅色に染まった桜の花が迎えるなかを、多くの随喜寺院と可愛らしいお稚児さん、そして檀信徒の方々からなる練り行列がはなやかに行われました。大殿での法要も厳かなうちに執り行われ、お導師が元祖・法然上人の遺徳を謝す表白を読み上げると一同に手をあわせ、またお導師の声にあわせてともどもに高声にお念仏を唱え、祈りを捧げていた参拝者の熱心な表情が印象的でした。

会員一同、この度の御大役を心からお祝い、お慶び申し上げますとともに、重ねて益々のご活躍をご祈念申し上げます。誠に改めてとうございしました。

●待望の「J・FORUM」(浄土フォーラム)開設

「浄土」では、以前からご要望の声の多かった読者のコーナー「J・FORUM」を四月号より開設しております。短歌や俳句、書評、随筆や詩、身近な出来事や情報など、左記の要領でどなたもご応募下さい。なおタイトルは自由です。採用分に關しては記念品を進呈致します。

◆投・稿・募・集・中◆

- 1 随筆・詩など…四百字詰め原稿用紙十枚以内
- 2 俳句・短歌・川柳など…二首まで
- 3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりとお気軽にお聞かせ下さい…適宜

投稿は随時受け付けております。ただし採否に關しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。秀作もお待をしています！

●会員募集のお知らせ

当会では随時新規会員を募集しています。檀信徒、お知り合いの方々にも本誌のご講読をお勧め下さい。また、ご寺院の皆様方には一般会員（会費三〇〇〇〇円）のご入会をお願い致しております。一般会員の方には本誌を毎号五部お送りしておりますので、一層読みやすく、楽しくなったこの『浄土』を是非とも檀信徒教化にご活用下さい。

●新規会員紹介（敬称略、順不同）

△一般会員△

福島	浜通り組	善導寺
東京	品川	宝蔵寺
講読会員		
千葉	葛南組	最勝院
佐賀	西部組	専称寺
埼玉	所沢	内堀拓潤
群馬	邑楽郡	松崎シン
宮城	石巻	須田雄一
埼玉	新座	正福院

●会費ご請求のお知らせ

平成七年度の会費につきまして、近日事務局より会員各位に別途にご請求させて頂きますので、同封の振込用紙にてご送金下さい。なお、当会の運営並びに『浄土』の発行費用は皆様の会費によってまかなわれております。請求書がお手もとに届きましたら、忘れずに、早めにお振り込み頂きますよう重ねてお願い致します。また、ご不明の点がございましたら事務局までお問い合わせ下さい

↓お問い合わせ、投稿は：

法然上人讃仰会

〒一〇五東京都港区芝公園四一七一四

明照会館内

TEL 〇三―三五七八―六九四七

FAX 〇三―三五七八―七〇三六

東京	城南組	月窓院
長野	長野組	古田幸隆
神奈川	京浜組	善養寺
東京	北部組	念佛院



最近連日のように新聞のトップを、ある宗教団体の記事が独占している。この何とも恐ろしい宗教を名のる団体は、その教義として「仏教」を名のり、釈尊の言葉までも引用して釈明会見を行っている。一般の多くの人々が「たから宗教は怖い」などと口走り、テレビで著名人が「宗教は生活の陰の部分、後ろ盾の部分であり、生活のすべてであるなどという宗教はとんでもない話だ」「社会の価値観に迎合しない宗教は間違っている」などという言葉を聞くと、今回の問題、対岸の火事、ただの一新新宗教団体の問題と片づけられない気がしてくる。

少なくとも宗祖は、「たとい余事をいとなむとも、念仏を申し申し、これをする思いをなせ。余事をしし、念仏すとは思ふべからず」と申しているのであるし、社会の価値観と違う価値観に立つことによって、すべての罪人までもが救われることが念仏の道である。この事件から巻き起こる宗教論議、世間の動向にも注意してゆきたい。

そうした意味からも、今回ご紹介したテイク・ナット・ハン師は、本物の平和主義者、本物の社会派僧侶である。偽物との違いを見極める意味でも、是非お会いしてみて下さい。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川代潤
齋藤晃道
栗田順一
村田洋一
太田正孝
石上俊敬

編集協力

オフィス 頼興表 佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

●お願い

町名変更や移転などで住所や電話番号が変わる際には、お手数ですが事務局までお知らせ下さい。本誌がお届けできなくなるなど、支障が来すことがございますので、よろしくお願い致します。

浄土

六十一巻 五月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成七年四月二十五日
発行 平成七年五月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社 平文社

写真植字 株式会社 シーティーイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四 七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三 五七八 六九四七
FAX 〇三三三 五七八 七〇三六



ノドうつ うまさ。 黒ラベル

ただいま、渴いています。ビールを欲しがっています。

ノドが、体が、さして、黒ラベル。フシュッ！ゴクゴクゴクゴク。

「あーッ生きてよかったー！」と、声が出る。

このうまさは、何なんだ。ノドたく快感、

駆けぬける爽やかな味わい。1秒1秒が、

たまらない喜びに満ちている。

この黒ラベルの味、ひとこというと？

「ノドうつ、うまさ。それが黒ラベルです。」

ビールは、20歳になつてから あきかんはリサイクルへ

●この瓶の緑い自動販売機にも酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。



新デザイン缶

サッポロ(生)黒ラベル

サッポロビール株式会社



LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を誇る最大の基準は、その姿とかたちである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。

PHOTO: セドリックV30 ツインカムターボ プロラム
VIP ● 全長4800×全幅1745×全高1410(%) 主な装備 ● VG30DET (V6 ツインカムターボ・総排気量2960cc) エンジン ● 最高出力255PS/6000rpm (※NET値) ● 最大トルク35.0kgm/3200rpm ● フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT) (※NET値) とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同条件で測定したものです。日産自動車株式会社お客様相談室 ● 全国共通フリーダイヤル0120-315-232 …………… お近くのローレル販売会社へ。